

<日本・アジアのキリスト教> (演習・Seminar)

A: 日程・場所

演習日 (前期) : 4/14, 21, 28, 5/12, 19, 26, 6/2, 9, 16, 23, 30, 7/7,
7/14, 21, 28, (8/4)

場所 : 第3演習室 (新館2階) → 変更?

夏期の日本キリスト教史の集中読書会 (後日日程を決定)

テキスト : 隅谷三喜男著『近代日本の形成とキリスト教』新教出版社。

B: テキスト

・波多野精一『宗教哲学』(1935) (『波多野精一・全集4』岩波書店)

C: 演習の意図・目標

・日本・アジアのキリスト教研究に向けて

- ①東北アジア (朝鮮半島・日本・中国・台湾) のキリスト教
- ②宣教師サイドからの視点との統合
- ③アジアにおける新しいキリスト教形成の可能性
- ④アジアの固有の課題とキリスト教 (アジアの近代史のコンテキストにおいて)
- ⑤フィールド・ワークにおける研究方法の確立
- ⑥共同研究の実施

・日本キリスト教思想研究 : 近代日本とキリスト教思想との相互関連を中心に

1. 2001年度の矢内原忠雄、2002年度の内村鑑三に続いて
2. 近代日本 (天皇制・民族主義) とキリスト教
3. 明治期の日本キリスト教における神学の受容と形成
新神学論争、植村・海老名論争
4. 2005年度から、植村正久と日本のキリスト教的宗教哲学 (学問的キリスト教思想)
の系譜
とくに、2006、2007年度は、植村正久とその思想的展開 (高倉徳太郎)
5. 2008年度から、波多野精一。

・研究会との相互関係 : 研究拠点の形成に向けて

「アジアと宗教的多元性」研究会 (現代キリスト教思想研究会)

『アジア・キリスト教・多元性』創刊号～第8号。

『比較宗教学への招待—東アジアの視点から—』晃洋書房 2006年

D: 研究の現状

- ①通史の試み
- ②個別教派・教団・教会の歴史編纂
- ③宣教師の伝記・書簡・公式の報告書
- ④人物研究 (内村、新島、海老名、新渡戸、植村など)
- ⑤新聞・機関誌などの基礎資料の整備

全体的に、日本キリスト教思想研究が、各地の研究グループレベルの議論を超えた、キ

リスト教研究としてまだ確立していない。

土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史論』（教文館）

E：波多野精一

1. 『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局）より

波多野精一（1877.7.21～1950.1.17、明治10～昭和25）

宗教哲学者、長野県（松本町）に生まれる。

第1高等学校から東京帝国大学文科大学哲学科へ、大学院でR.ケーベルに学ぶ。

1900年、東京専門学校（現在の早稲田大学）講師となり、西洋哲学史を講義。04年より、ベルリン、ハイデルベルク大学に学び、ハルナック、ヴィンデルバンドらに師事。帰国後、東京帝国大学で原始キリスト教を講義

1917年京都帝国大学教授となり宗教学講座を担当。47年に玉川学園大学教授に招聘。

『宗教哲学』（1935）、『宗教哲学序論』（1940）、『時と永遠』（1943）

2. 『京都大学百年史／部局史編1』第2章より

波多野精一（1877～1950）が大正6（1917）年12月に宗教学講座に着任

キリスト教の学術的研究のため寄付された渡辺荘奨学資金により、大正11（1922）年5月本講座が宗教学第2講座として設置され、波多野がこの講座を兼担することになった。波多野は、原始キリスト教、パウロおよびヨハネの宗教思想、宗教思想史等について講じ、退官後発表された『時と永遠』（1943年）のような、キリスト教の立場に基づく宗教哲学をも構想しつつあった。波多野の厳密なテキスト読解と深い宗教哲学的思索とが、本講座の礎石を据えたといつてよい。

波多野は、昭和2（1927）年、本講座の兼担を解かれて分担となったが、昭和12（1937）年3月には宗教学第1講座から本講座の担任者となり（第1講座を分担）、本講座は初めて専任教授を持つことになった。しかし同年7月に波多野は停年退官し、昭和23（1948）年まで講座担任者のいない状態が続くことになった。

3. 宮本武之助『波多野精一』日本基督教団出版部。

生涯と思想的発展、波多野宗教哲学の立場と方法、生の三段階、宗教の本質と類型、人格主義の宗教

4. 植村より見た、近代日本のキリスト教思想形成の系譜とその意義

植村 → 高倉 → 東京神学大学の組織神学の伝統

→ 波多野精一とキリスト教的宗教哲学の意義

→ 現代におけるキリスト教宗教哲学の可能性

cf. 内村鑑三と無教会の系譜

F：ゼミの進め方

- ・4/14：オリエンテーション（本日）
- ・4/21：昨年度までのまとめ＋担当者確定
- ・毎回担当者が、テキストの内容を説明し、問題提起し（テキスト外の資料などを合わせて用いる）、議論を行う。担当者はレジメを用意する。残った問題は宿題とする（次回の冒頭で報告する）。
- ・必要な解説を行う（芦名）。
- ・成績はゼミでの発表によって評価し、夏期休暇の間にレポート作成してもらう。

G : 文献

より包括的な文献表としては、<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub8d.htm>、<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub9a1.htm> を参照。

Barrett, Kurian, Johnson (eds.), *World Christian Encyclopedia*. vol.1-2, second edition
Oxford University Press 2001

Scott W.Sunquist (ed.), *A Dictionary of Asian Christianity*, Eerdmans Publishing 2001

国際基督教大学・アジア文化研究所編 『アジアにおけるキリスト教比較表』(創文社)

日本基督教団出版局編 『アジア・キリスト教の歴史』(日本基督教団出版局)

富坂キリスト教センター 『鼓動する東アジアのキリスト教』(新教出版社)

鵜沼裕子 『史料による日本キリスト教史』(聖学院大学出版会)

隅谷三喜男 『日本プロテスタント史論』(新教出版社)

『近代日本の形成とキリスト教』(新教出版社)

出口光朔 『近代日本キリスト教の光と影』(教文館)

土肥昭夫 『日本プロテスタント・キリスト教史』(新教出版社)

『歴史の証言 日本プロテスタント・キリスト教史より』(教文館)

海老沢有道・大内三郎 『日本キリスト教史』(日本基督教団出版局)

中央大学人文科学研究所 『近代日本の形成と宗教問題』(中央大学出版部)

高橋昌郎 『明治のキリスト教』(吉川弘文館)

古屋安雄・大木英夫 『日本の神学』(ヨルダン社)

武田清子 『土着と背教 伝統的エトスとプロテスタント』(新教出版社)

古屋安雄他 『日本神学史』(ヨルダン社)

石田慶和 『日本の宗教哲学』(創文社)

マーク・R・マリNZ 『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』(トランスビュー)

近藤勝彦 『デモクラシーの神学思想 自由の伝統とプロテスタンティズム』(教文館)

(植村、内村、海老名、吉野作造、南原繁)

佐藤敏夫 『植村正久』(新教出版社)

大内三郎 『植村正久 生涯と思想』(日本キリスト教団出版局)

『植村正久論考』(新教出版社)

武田清子 『植村正久 その思想史的考察』(教文館)

雨宮栄一 『若き植村正久』『戦う植村正久』『牧師植村正久』(新教出版社)

崔 炳一 『近代日本の改革派キリスト教—植村正久と高倉徳太郎の思想史的研究—』

(花書院)

森岡清美 『明治キリスト教会形成の社会史』(東京大学出版会)

森本あんり 『アジア神学講義』(創文社)

徐正敏 『日韓キリスト教関係史研究』(日本キリスト教団出版局)

芦名定道 「日本の宗教状況と宗教間対話の可能性」、*Journal of the Institute of Asian Area Studies*, 釜山外国語大学 アジア地域研究所 2004年、1-18頁。

「東アジアの宗教状況とキリスト教—家族という視点から—、

『アジア・キリスト教・多元性』創刊号 現代キリスト教思想研究会
2003年、1-17頁。

芦名定道・金文吉 「死者儀礼から見た宗教的多元性—日本と韓国におけるキリ

スト教の比較よりー」、『人文知の新たな総合に向けて（21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」）』第二回報告書Ⅲ[哲学篇2] 2004年、5-23頁。

「アジア・キリスト教研究に向けて（1）」、
『アジア・キリスト教・多元性』第3号 現代キリスト教思想研究会
2005年、71-88頁。

「アジア・キリスト教研究に向けて（2）」、
『アジア・キリスト教・多元性』第4号 現代キリスト教思想研究会
2006年、43-62頁。

「植村正久とキリスト教弁証論の課題」、
『アジア・キリスト教・多元性』第5号 現代キリスト教思想研究会
2007年、1-22頁。

「植村正久の日本論（1）—近代日本とキリスト教—」、
『アジア・キリスト教・多元性』第6号 現代キリスト教思想研究会
2008年、1-24頁。

「植村正久の日本論（2）—日本的伝統とキリスト教—」、
『アジア・キリスト教・多元性』第7号 現代キリスト教思想研究会
2009年、1-20頁。

「韓国キリスト教の死者儀礼」、『東アジアの死者の行方と葬儀』勉誠出版、
2009年、96-104頁。

「『アジアのキリスト教』研究に向けて—序論的考察—」、
『アジア・キリスト教・多元性』第8号 現代キリスト教思想研究会
2010年、79-104頁。

石原謙編『哲学及び宗教と其歴史——波多野精一先生献呈論文集』（岩波書店）

石原謙・田中美知太郎・片山正直・松村克己

『宗教と哲学の根本にあるもの——波多野精一博士の学業について』（岩波書店）

『追憶の波多野精一先生』（玉川大学出版部）

京都哲学会『哲学研究』第406号（波多野精一博士追悼号）

浜田与助『波多野宗教哲学』（玉川大学出版部）

宮本武之助『人と思想シリーズ 波多野精一』（日本基督教団出版部）

『宮本武之助著作集 上下』（新教出版社）

側瀬 登『時間と対話的原理——波多野精一とマルチン・ブーバー』（晃洋書房）

安藤恵崇「時と永遠への思索——波多野精一」、藤田正勝編『日本近代思想を学ぶ人のために』世界思想社、1997年、118-135頁。

片柳栄一「時と永遠——波多野精一」、常俊宗三郎編『日本の哲学を学ぶ人のために』世界思想社、1998年、257-286頁。

原口尚彰 「日本新約聖書学史における波多野精一」、『キリスト教史学』（キリスト教史学会）第60集、2006年、87-102頁。

村松 晋 「波多野精一と敗戦」、『聖学院大学論叢』第19巻第1号、2006年、63-72頁。

「波多野精一の時代認識」、『聖学院大学論叢』第19巻第2号、
2007年、140-146頁。

佐藤啓介 「愛ゆえに、我在り——田辺、波多野、マリオンと存在—愛—論」、片柳栄一編『ディアロゴス——手探りの中の対話』晃洋書房、2007年、216-236

頁。

「波多野精一の存在—愛—論」、『日本の神学』（日本基督教学会）46、2007年、31-52頁。

「神の言葉の器としての人間——波多野精一の象徴論の存在論的再解釈をめざして」、『聖学院大学論叢』第22巻第1号、2009年、181-189頁。

鵜沼裕子 「日本キリスト教史における「他者」理解をめぐる 波多野精一の場合」、『聖学院大学総合研究所紀要』第41号、2007年、132-160頁。

< 2008年度の要約 >

『西洋哲学史要』（1901）

『基督教の起源』（1908）

「スピノザ研究」（大学院卒業論文、1910）

「カントの宗教哲学について」（1913）

「歴史の意義に関して——ギリシア思想とヘブライ思想と」（1922）

西洋思想研究（哲学+キリスト教思想）に基づく宗教哲学構築

哲学史研究者（古代ギリシャ哲学と近代哲学、特に観念論的系譜）

キリスト教思想研究者（聖書学、宗教改革、神秘主義）

現代宗教学（経験）、宗教研究の哲学的方法論的な反省

↓

宗教哲学

宗教を人間の生の営みにどのように位置付け、理性的な理解にもたらすか（哲学）

具体的な宗教経験に即した・それを正当に扱いうること（宗教的基盤・体験）

「アジア・キリスト教・多元性」第8号、2010年3月

<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christ/asia/journals/asia8asina.pdf>

「アジアのキリスト教」研究に向けて —序論的考察—

芦名定道

1. はじめに

本稿の目的は、「アジアのキリスト教」、「アジア的キリスト教」あるいは「アジアの神学」（同様に、「日本のキリスト教」、「日本的キリスト教」あるいは「日本の神学」）といった仕方で問題とされてきた、アジアや日本を対象としたキリスト教研究に関して、問題点を整理し、今後の研究の可能性を展望することである。

東アジアや日本に、プロテスタント・キリスト教が伝来して、150年以上におよぶ歴史が経過し——ローマ・カトリック教会などの宣教も含めればさらに長い歴史が存在する——、「アジアのキリスト教」や「日本のキリスト教」は本格的な思想研究の対象とされるべき段階に達している。実際、少なからぬ研究の蓄積がすでになされているが、しかし、「アジアのキリスト教」をめぐる研究状況は必ずしも満足の行くものではない。多くの試みがなされてきているにもかかわらず、未だ研究の方法論的基盤は脆弱なままである。本稿では、「アジアのキリスト教」研究の方法論に関連したいくつかの問題を論じることによって、将来の本格的研究の序論的考察を行いたい。

扱われるのは以下の諸問題である。まず、第二章では、「アジアのキリスト教」の「の」をめぐる諸論考を参照しつつ、研究の視点の多様性を明らかにし、日本の土着化論を紹介

する。続いて、第三章における土着化論の批判的再考を前提に、第四章では、「アジアのキリスト教」研究についての本稿の方法論的立場を提示する。⁽¹⁾そして、最後の第五章において、今後の研究を展望することによって、本稿を結びたい。

5. むすび

これまで、本稿では、「アジアのキリスト教」研究に向けた序論的考察として、研究の方法論に関わる諸問題を論じてきた。先行研究を参照することによって、研究の「地平モデル」が提出されたが、それは、「アジアのキリスト教」という研究対象を、その対象の解釈学的構造に即して、複数の地平と地平間の融合において研究することを目指すものであった。「アジア」と「キリスト教」という二つの歴史的地理的地平をそれぞれにふさわしい仕方を取り扱い、関係の「の」が含意する多様な視点を包括する試みである。この関連で、アジアや日本の「宗教文化」に適切な宗教概念の形成、また、宗教（伝統）と文化（世俗）との関係性の明確化などの諸課題が明らかになった。

本章では、以上の議論とは別のポイントから「アジアのキリスト教」研究を展望することによって、本稿の結びとしたい。それは、「アジアのキリスト教」の研究主体をめぐる問題であり、とくに次の二つの点について指摘することにしよう。

①地平融合と相互変革はいかなる「自己」を生み出すか。

アジアの宗教的伝統に土着化するキリスト教は、そこに成立する「自己」に関しても、基本的な問いを投げかけることになる。たとえば、キリスト教徒でありかつ仏教徒であるような自己、あるいは、二つ（複数）の宗教に等しくコミットする人格は可能か。また、このような自己について、その唯一性と自己同一性はいかに理解すべきか。自己をめぐるでは、ポスト近代の思想状況という観点からも問われるべき問題は少なくないが、「アジアのキリスト教」という問題との関わりにおいて、次のような議論がなされている。

「私の人格的同一性は、私の存在を構成する複数の要素あるいは要因の知解可能な統一性ではなく、むしろ、それらの要素や要因の共属性(the belonging together)の自覚である」(パニカー、1999、37)、「要するに、私は自分自身をキリスト教的—仏教的—ヒンドゥー的なものとして見だしているのである。」(ibid.、46)

「以上に言及した神学者らの思想にとって、アジアの宗教としての仏教は、単にキリスト教の『外にある他者』ではなく、彼らの信仰にとって『内なる他者』であった」(金、2006、164)、「アジアの諸宗教は、アジア人のキリスト教信仰にとって単なる外部的付加物ではなく、アジア人のキリスト教信仰を内的に構成している『内なる他者』として把握されねばならない。アジアにおける宗教史は、アジアキリスト教信仰の深層と周縁を形成しているため、アジアのキリスト教者にとって他宗教との対話とは、自分の中の他者を発見し、自分の信仰の奥底を掘り出す作業に当たる、ということである。要するに、アジアのキリスト教者においてアジアの他宗教は、認識の対象ではなく、存在の範疇として位置づけられる。」(ibid.、166)

こうした複合的な「自己」のあり方は、伝統的で近代的な実体的自己という自己論の改訂あるいは再考を要求するものであって、⁽²⁸⁾「アジアのキリスト教」という研究テーマは、そこに生成する自己の多元性や内なる他者の問題を通じて、現代人の変貌する自己の問いにも関わっているのである。

②宗教研究の担い手について。

「アジアのキリスト教」研究、とくにアジアの文脈における宗教間対話の可能性については、すでに多くの議論がなされてきている。しかし、その一方で、宗教間対話自体が制

度化を経ることによって、いわば「ルーティンとしての対話」に陥っていることも否定できない。また、「アジアのキリスト教」という研究テーマが内包する多様な視点と課題を考えれば、この研究が個人レベルでの研究を超えた共同研究を要求することは容易に理解できるであろう。つまり、問われるべき問題は、ルーティン化された対話を超えて、それとは別の仕方での共同研究をいかに構築するのか、その意味で、「アジアのキリスト教」研究の主体は誰か、ということになる。

この問いに対しては、大学やそれに関連した研究所、一定の地域において繋がった比較的小規模な学会・研究会、また特定の宗教団体を基盤とした研究センターなど、様々な共同研究の場が指摘できるであろう。⁽²⁹⁾ 実際、こうした形態の研究が、今後の「アジアのキリスト教」研究をリードするものとなることは疑いもない。しかし、忘れてならないのは、ここで問われているのが、新しい形態の知の大胆な創出とそれを担いうる主体の構築であるという点である。それには、いくつかの条件が考えられる。共同研究の主体のサイズは、緊密な討論を可能にする大きさ、つまり、大きすぎずまた小さすぎず、おそらくは、10名程度から数10名程度の規模になるだろう。また、特定の宗教の研究者だけでなく、多様な宗教あるいは無宗教の立場の研究者にも開かれていると同時に、専門性を有する研究者が継続的な討論を行うだけの恒常性も必要となる。こうした条件を満たす研究の場が日本においてどのように構築可能になるかは今後に待たねばならないが、「アジアのキリスト教」自体の中に、そのヒントが存在しているように思われる。たとえば、ピエリスは、ラテン・アメリカの解放の神学における「基礎的共同体」に相当する場を、アジアの解放の神学の担い手として取り上げている（ピエリス、1988、112）。それは、インドのキリスト教から始まり、日本にも伝えられている、キリスト教アシュラムに重ねることも可能であろう。⁽³⁰⁾

「アジアのキリスト教」研究については、その研究方法をめぐる諸問題だけでなく、その研究の主体をめぐる論じるべき事柄が多く存在しており、こうした論点を踏まえた着実な議論の踏み上げが期待されているのである。